# 十一月総評　　立花開

倒れるまでは
立っていたんだ夕立に

音無　早矢　埼玉県

失うまでは在ることに気付かない。倒れるまでは立っていることが自然であることにも気付かなかった。夕立の中で、さっきまでいた自分の空間が雨で押し流されていく。体は立っているかもしれないけれど、心は倒れ込んでいる。からっぽになった入れ物の体も心も濡れていく。

脳腫瘍削いで秋風残る窓

田崎森太　東京都

脳腫瘍は摘出しなければならないけれど、自分の皮膚の、肉の奥深くに繋がっていたものでもある。異物でありながら自分のものでもある。削がれた場所が空白になり、体の窓となって本当の窓から入ってきた秋の風を通していく。涼やかで、痛みの伴う空白。

ふらここに
ここと呼ばれて
陽の在り処

玻璃　愛媛県

呼ばれることは互いの存在を知らせ合うこと。ふらここの場所を知り、ふらここに場所を知られる。知り合うことは怖いことだが、この声は柔らかいのだろうと思う。ふらここにも、呼ばれた主体にも、あたたかい陽が差し込む。声を出して存在を知らせることは、生きることの根源である。

北窓塞ぐかつては猫だった粘土

日下部　友奏　群馬県

かつて違うものだった気配を纏っている。粘土に猫だった記憶がなければいいけれど。この世のあらゆるものは実はちがうものから変容したのかもしれない。幼少の頃に自分が触っていた粘土は、かつて何だったのだろう。自分もいつか粘土になってしまう可能性があると思うと恐ろしい。

中心をにぎっていても
中心にいるわけでない
雨傘のひと

和泉次郎　新潟県

誰もが無意識的に生きるために自分が世界の中心にいることを信じている。傘を持つことで世界の中心にいる体に、更に核ができる。芯の周りにできる淡い膜のように傘の柄に存在がまとわりつく。けれど、中心にいると思っているだけでその存在から端にいるのかもしれない。

街灯が照らすそこだけ雪がふる

azusa　京都府

光によってしか、私たちは物があることを認識することができない。照らされて見えるのではなくて、見えない部分に広がる無限の気配が光の差す場所を押し出すようにしているだけなのかもしれない。闇の中では降らない雪。

風船はなくてもいいぜ
バースデー

小宮　颯人　東京都

祝ってもらえるのを前提で考えていることに気が付いていないところが可愛らしい。「いいぜ」とニヒルに振舞っていても、言っているのは「風船は」いらないという背伸び。いつまでもこの世にはそれ以上に無理をするものはないと思っていてほしい。欲しくても我慢するのは風船までしかないと。

あなたは私の問題集
解くためにあって
好きになる事は出来ない

てふの雀　愛知県

結ばれるための愛と見届けるための愛とがある。愛を知った後見えるものが増えるのは後者なのかもしれない。けれど、分からない一冊の問題集を解くような苦しさの中でしか想えないならば、好きにはなれないと自分に暗示をかけて、気持ちに名前が付く前に解き終わらなくてはならない。

夜そびえ水飴耳に落ちるよな
インフルエンザ脱いだり着たり　　五月閉じ花　北海道

熱や症状がぶり返すことをウイルスを脱いだり着たりといったり、高熱に意識が朦朧とする感覚を水飴が耳に落ちるというなど、独特な言い回しが面白い。目に見えないものや感覚を物質として捉えることはよくあるが、物質に変えてから更に動作を加えることで個性が光る。

ひらがなでしゃべれば
ばらばら散らばって
嘘ってゼリービーンズみたい　　ひろみ　京都府

片仮名なら、漢字なら、「嘘」は飛び散らないのだろうか。そんなことはない、ひらがなでも片仮名でも漢字でも、嘘は飛び散ってしまう。口にしたそばから心がぼろぼろと崩れていく。ゼリービーンズのように散らばっているのは、嘘ではなくて自分の心。